

「豊かな読書文化を育むための著作権教育～守ってさらに上手に利用する～」

金沢市立小坂小学校 小林 祐紀

1. 情報モラル教育のカリキュラム化の先に

本校では、情報モラル教育をカリキュラムに位置づけて、各学年がさまざまな時間の中で取り組んでいる。コンピュータールームには、携帯電話を仮想的に体験できるアプリケーションも導入され、実際の体験に近い形で授業を行うこともできる。著作権教育についても、「自分がつくったものを勝手に使われない権利」として、低学年のときから学活や道徳の時間に学習を続けている。

したがって、今年度担当する6年1組の子どもたちも、すでに著作権という言葉や意味はおおよそ理解している状態である。

一方で、高学年になると、子どもたち自身がLINEなどのSNSを利用する機会が増える。だからこそ、情報モラル教育を実践する際には、なるべく身近な出来事だと感じさせるために、ニュースの記事や近隣の学校で実際に行ったトラブルなどを教材として用いることが多くなってきた。

カリキュラムに位置づけることで一応の指導体制は整ってきた。しかし、どこか子どもたちの現実と切り離されている感じが否めず、授業づくりに苦心してきた。特に高学年になると、その傾向を強く感じるが多い。

そこで、日常的な授業の場面からつながる形で情報モラル教育を実施する必要性を感じていた。そうすることで、実感を伴った理解となり、実生活の場でも大いに生かされるのではないかと考えた。

2. 読書推進モデル校の中でも特に本が大好きな子どもたち

本校は、昨年度までの2年間読書推進モデル校として、さまざまな形で授業における読書利用をすすめてきた。市立図書館からの団体貸し出しも、市内の学校の中でトップクラスである。子どもたちの読書冊数も年間100冊を超える子どもも多い。

そのような本校の中でも6年生は、読書好きが多い。6年1組の場合、読書が好きだと答えた割合は9割を超える。朝の15分間読書やテスト終了後などの隙間の時間には、静かに全員が読書している。

このような子どもたちだからこそ、国語科「やまなし：宮沢賢治」（光村図書）を学習した際にも、賢治独特の世界観に戸惑いながらも、やまなしという一つの果物に、賢治自身の理想の生き方を描いたその偉大さに感動し、他の作品をもっと読んでみたいという気持ちになっていった。そして、宮沢賢治の作品をまだ読んだことのない多くの下級生に向けて、作品の良さを記したポップを作り、紹介しようと国語科の学習を進めていった。しかし、読んでみたい宮沢賢治の作品が団体貸し出しを利用して、全てはそろわないという現実と直面した。

3. 授業を行うにあたって目指したもの

著作権教育はともすれば、「・・・はしてはいけない」という類のべからず指導になりかねない。その際には、「もししてしまったら大変なことになる（怖いもの）」という危機意識を同時に植え付けることが多い。

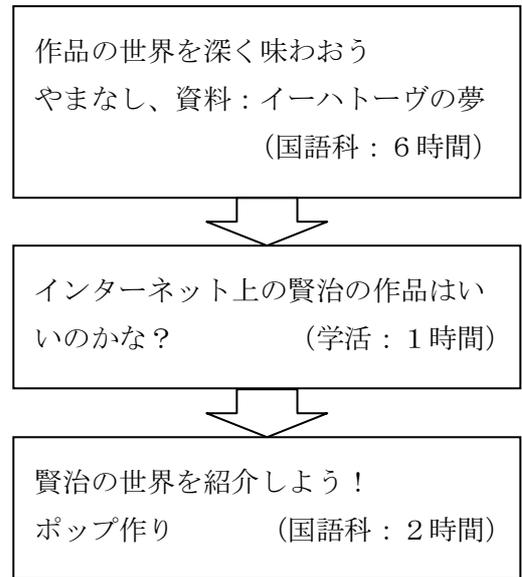
このような指導の必要性を認めつつも、著作権を守ることは、長い目で考え時に、自分たちの生活をより豊かにするものと感じてほしいと考えた。筆者が所属する金沢市小学校研究会情報部会や本校の情報部会では、この考え方で情報モラルの授業の再構成を試みてきた。そして、今回は、著作権を守るこ

とことの良さだけでなく、これからの未来を築いていく子どもたちに、著作権を上手に利用することで生まれる良さにも気づかせたいと願った。

4. 授業に至るまでの経緯

宮沢賢治の作品がすべてはそろわないという現実直面したときに、児童 A が、インターネット上に作品が掲載されていることを見つけてきた。しかし、著作権上問題があるのではないかという声が、何人もの子どもからあげられた。でも、せっかくあるのだから、利用しようと言う声も同時に聞かれた。

そこで、「やまなし」を読み終え、多読して作品の良さを紹介するポップ作りを行う前に、この問題について解決しようと呼びかけ、学活の時間として、著作権教育を行うことにした。



国語科の流れを含めた学習計画

5. 授業の実際

本時のねらいを次のように設定した。

著作権には効力があるということを理解し、著作権を有効利用することは、読書文化を育むことにつながり、私たちの生活を豊かにしてくれる可能性があることに気づく。

以下授業の様子を詳細に記述する。授業は直接的に出された国語科で出された課題に向かうことは、あえてせずにすすめた。それは、一部子どもたちの問題意識だけで授業は成立しない。問題意識を全員で共有したいと考えたからだ。また、宮沢賢治だけではなく、書籍全般の話へと関心を向けたいと考えたからである。

(1) 授業の導入部分

授業の導入では、国語の授業で出てきた疑問を解決しようと言った後に、おもむろに「本は好きですか。」問うてみた。予想通りほぼ全員が手を挙げる。その顔はとてにこやかだ。

次にその理由をワークシートに書かせた。こちらの想像以上に好きな理由はさまざま出された。

- ・続きがとっても楽しみになれてうれしいから。
- ・夢中になれることが楽しいから。
- ・とにかくおもしろいから。
- ・自分自身の勉強になるから。
- ・知識が増えるから。
- ・伝記などを読むと生き方を学べるから。
- ・リラックスできるから。

次に、「日本ではいったい一年間でどのぐらいの本（点数）が発売されているのだろうか。」と問いか

けてみた。子どもたちは口々に予想を立てている。「1000?」「30000?」「さっぱり予想できない。」など。

2009年出版指標年報によると、2010年では、74000点以上が出版されていることがわかる。子どもたちにも2000年から10年間の出版点数を記した資料を配付し、一言感想を書かせた。「多すぎる!」「たくさんだ。」「全部はどうてい読めない。」など出版点数の多さに驚いた感想がほとんどであった。

そこで、「たくさん本が出版されるとよいことって何だろうか。」と問いかけた。考えことをグループで交流した後に発表させると、次のようなことが発言された。

- ・読みたい本を見つけやすい。
- ・自分好みのいろいろな本が手に入る。
- ・本を選ぶときに選び甲斐がある。
- ・本を選ぶときに幅が広がる。
- ・とにかく楽しめる。
- ・たくさんあるだけでうれしくなる。



グループで考えを交流する

「たくさん本が出版され、たくさん本を読めるということは、小坂小学校で大切にしてきた読書で心を豊かにすることと通じるね。」と多くの本が出版されることの良さを確認した。そして、「同時にこれだけ多くの本が出版されていると、たとえばあなたの好きな小説の本を全部読むことは・・・」「できない」「できるわけがない」と子どもたちと確認した。

このおさえがとても重要である。つまり、良い本があったとしても読まれない本があり、その数の方が圧倒的に多いのである。ここから宮沢賢治につなげていく。

(2) 授業の展開部分

宮沢賢治の写真を見せる。だれかと尋ねると全員が宮沢賢治と即答する。

「みんな、やまなしの学習をするまで宮沢賢治の作品を読んだことがある人？」と尋ねると1人だけであった。その一人に感想を聞くと「正直、よくわからなかった。」と答えた。

「でも今では、宮沢賢治のすごさに気づき、生き方に感動し、他の作品も読みたいと思っている。」子どもたちはうなずきながら聞いている。

「宮沢賢治は教科書に載るぐらい有名だから、本になって発売されているし、今回も図書館から借りることができた。混み合っていて全部は借りられなかったけど・・・。」

ここで、人気のある本や有名な本は、版を重ねて出版されている事実を説明した。その際には、子どもたちがかつて読んだと思われる絵本などを用いた。さらに、本は1000冊程度の単位でしか、印刷せず、再版されなければ絶版となってしまうことも説明した。その際には、私がどうしてもほしくて手に入れた教育関係の本を見せ、探すことに苦労した話や、定価よりも高額だったことも話した。

この後、この事実からどんな問題が考えられるか意見を出し合った。そして、「人気があればなかなか再版されない。特に昔に出版された本は、いくら素晴らしい本であっても再版されにくいし、本屋

さんでなかなか手に入れようもしない。」ということをおさえた。

ここで、電子黒板に青空文庫を提示した。

続けて著作権の効力は50年であることを伝え、子どもたちに予想させた。子どもたちは、見事に「作者が亡くなって50年たった作品が載っている」と予想できた。宮沢賢治が無くなってから本当に50年たっているのか年表で確認する姿も見られて微笑ましかった。

このサイトは著作権法に違反していないということが分かり、このサイトを見つけてきた子はもちろんのこと、みんなほっとした様子であった。

(3) 授業の終末部分

タブレット端末を活用して、5分ほど自由に青空文庫を見る時間を設定した。子どもたちは、見知らぬ作家たちを眺めていたり、宮沢賢治の作品に目を通し「本当に教科書をいっしょだ。」と声をあげたりしていた。

「この青空文庫の良さは何だろうか」と投げかけた。グループで考えをどんどん出し合っている。驚いたことに、授業の流れを踏まえた考え以外にも、デジタルの良さを追求した考えも聞こえてきた。

グループで1つずつ意見を発表させた後、まだ出されていないことで発表できる子どもの発言と続いた。



タブレット端末でサイトを確認する

- ・もう発売されないかもしれない本を読むことができる。
 - ・自分たちが知らない作品を手軽に読める。
 - ・本屋さんに行かなくても手に入る。
 - ・拡大して読めるから、お年寄りにも優しい。
- ※この考えを出したグループは、昔の作品が多いためにお年寄りが利用するのではないかと推測している。
- ・買わなくてもよいかからどんどん読める。

最後に、青空文庫創設者の一人、富田倫生さんの青空文庫という名前に込めた意味を想像した。子どもたちからは「青空という美しいものにあこがれていたからかな。」や「青空ってどこか自由な感じがするから、富田さんが目指したものと同じような感じがしたからかな。」などの意見がだされていた。なかなか意見が考えられなかった子どもたちも、友だちの意見を聞いて、「なるほどね〜」や「あ〜」といった反応が聞かれた。

授業のまとめとして、著作権というのは、これまで学習してきたように守るだけではなく、みんなが大好きな本という人類共有の価値を受け継いでいくためにも大切であるということ。そして、それは読書文化を守っていくことになるということを学級全体で確認して授業を終えた。

その後、子どもたちが授業のふり返りを書き終わろうとする頃に、このサイトの運営はすべて、ボランティアで行われていることを告げた。子どもたちは、相当驚いた様子であった。対価を求めずに、読書文化を守ろうとする人々の行動に心が動かされたからであろう。



本時の板書

(4) 子どもたちの授業後の感想

著作権は守らないといけないけど、それを上手く利用している「青空文庫」はすごいと思った。確かにこれを使えばたくさんの人が本を読めるし、いつも本を読んでいる人も古くて新しい本に出会えるからだ。さらにボランティアでやっているのもすごい！（Uさん女兒）

著作権は、はじめは守らないと怖いことになると思っていた。このサイトもだめなサイトだと思っていた。だけど、ちゃんとしたやり方で利用するとみんなのためになると思った。そして、この青空文庫をつくった人はきつともとは本が好きだったから、みんなのためになることをしたんだと思った。（Sさん男児）

著作権があるから、無断でホームページにのせたら・・・と思うかもしれないけど、上手く利用すれば読みたいけど読めなかった人まで読めるようになるのがよく分かった。青空文庫の意味はすごくすてきだなと感じた。（Mさん女兒）

上記以外にも、「もっといろんな人の本を読みたい。（Iさん女兒：一部抜粋）」などの感想も見られ、本時のねらいは、十分に達成されたと感じている。

6. 授業の成果と今後の展開

(1) 成果

国語科に端を発した学習であった。そのために子どもたちにとって関心の高い学習となった。著作権は、作者の権利を守るだけでなく、これからの読書文化を守るにも大切なものであるという気づきが生まれた。そして、宮沢賢治だけに限らず、未だ知らぬ本への出会いを楽しみにするようになった。

(2) 今後の展開

本来的に、子どもたちの興味関心や実態に応じて情報モラル学習を展開することが望ましい。したがって、従来のカリキュラムに付け加える形で、本時のような事例を付記しておくことが必要となる。そのためにも、本時のような1時間という時間であっても、日常的な授業の中から生まれた問いを中心とした授業を模索し、授業開発を行っていく必要がある。